

大塚ホールディングス株式会社 2014年度 決算

質疑応答要旨

2015年2月13日

Q1: 2016年度以降の業績に対するアバニア社連結及び為替の影響は

A1: 2015年度はアバニア社と為替の影響で営業利益は当初想定より約200億円マイナスの計画だが、2016年度以降はアバニア社の利益及び新薬の成長が貢献するため、第二次中期経営計画を達成できると見込んでいる

Q2: 第二次中期経営計画では2016年度の研究開発費の計画は1,700億円だが、為替の影響でどの程度変動すると見込んでいるか

A2: 本年度と同じ為替レート的前提であれば、為替の影響は200億円程度と推定。為替は費用だけではなく売上や粗利にも影響するため、2016年度の営業利益1000億円は確保できると見込んでいる

Q3: 中枢神経領域における再生医療の細胞移植に関する社長の考えをご教示下さい

A3: 再生医療を含め、研究と実用化の進展が同時に進む事は考えにくい。当グループでも再生医療には着手している。脳機能にはまだ未解明な部分が多くあり、精神疾患と神経疾患についても疾患の原因が全く異なる。再生医療・細胞移植などの根本治療にも当然興味はあるが、困難も多いと考える

Q4: 2015年度のサムスカの売上は2014年度実績の1.5倍以上を計画しているが、既存の体液貯留に対する適応症とADPKD(多発性のう胞腎)の売上比率は。日本ではADPKDが医療費助成の難病指定されたことで処方数に影響は出ているか

A4: 日本のADPKDへの適応については現在全例調査を継続しており、慎重に進めている。2015年度売上計画の主な要因は心性浮腫に対する処方の増加

Q5: ロンサーフについて、腎機能障害や肝機能障害を有する患者対象のP-1を実施しているが、ニッチな患者を対象に今後の適応症を検討していくのか

A5: ご指摘のP-1試験は安全性確認を目的とした試験。今後は消化器がんを中心に展開を考えている

Q6: リーダー育成方針について、カルチャーやチャレンジ精神を次世代にどう伝えていくのか

A6: 元大塚製薬社長の岩本氏とは米国医薬品事業を共に歩み、事業を軌道に乗せていくことを常に議論してきた。リーダー像の資質は4つ。グローバル感覚、バリューチェーンを理解する力、社内外ネットワークを積極的に構築できるコミュニケーション力、そしてそれらを具現化した実績。今後、岩本氏の遺志を継ぎ、さらに事業を発展させる事が責任であり、岩本氏に続く厚い人材層を育成していくことが必要。主力製品の特許失効等の問題は、医薬品事業を展開する上では避けて通れない課題だが、企業の持続的成長を支えるリーダーをどのように育成していくかに今後も傾注したい

Q7: ロンサーフは2015年2月の薬事・食品衛生審議会医薬品第二部会で現在の適応症における「標準的な治療が困難な場合に限る」の限定が解除される見込みであるが、それを織込めば2015年度の売り上げはもっと伸びるのでは

A7: 2015年度の売上計画には織り込み済